鳥取県総合情報誌 vol.139

とっとりNow

Autumn 2023

巻頭特集

共に生き育む社会へ

動物愛護の取り組み

特集

音符がつなぐ時と絆

活動続けるビッグバンド＆合唱団

鳥取県総合情報誌 vol.139
とっとりNow
Autumn 2023

あーとの森	書 言水 抱泉	2
巻頭特集	共に生き育む社会へ 動物愛護の取り組み	4
開運おかげ詣で 因幡と伯耆の神社	貴布禰神社（米子市）	12
鳥取のうま味	〝恵み〟まるごとローフード	13
カメラアイ Camera Eye	燃える赤、晩秋彩る（智頭町）	14
企業紹介	オロル株式会社	16
TOTTORI おもしろ発見手帖	風と砂が育む命～砂丘の生きもの～	17
特集	音符がつなぐ時と絆 活動続けるビッグバンド&合唱団	18
VIVA!トットリLIFE 輝くIJUターン者たち	自給自足料理人（三朝町）	24
Voice・読者プレゼント・編集後記		26

□「ここにこの人」「きらり匠人」は休みます。

巻頭特集：保護され譲渡を待つ猫たち

特集：50年以上継続して活動するビッグバンド

●表紙イラスト●

池平 徹兵
いけひら・てっぺい

1978年福岡県生まれ。島根大学卒。東京オペラシティアートギャラリーprojectN、岡本太郎現代芸術賞展、VOCA展などに出展。

139号表題『鳥取へ行くライオン』

この秋、開かれる「とっとりNOW35周年記念交流会」で僕も登壇する。当日がさらに楽しみになるよう絵の中で会場の「ホテルモナーク鳥取」（鳥取市）へ一足先に訪れた。

キャンバス/油彩

『とっとりNOW』が毎号届く
「ふるさと来(ラブ)LOVEとっとり」
会員を募集中！
入会
年会費
無料

あーとの森
Forest of Art

文／角秋 勝治　写真／山内 一峰

熱量高く、常に挑む

書 言水 抱泉

躍動し弾ける、迫力の現代書。だが、以前の言水抱泉(ごんすいほうせん)さんは、目的意識に欠けていたと自戒する。転機は恩師・柴山抱海(ほうかい)さん（※）が発した、「書に対して誠実か、謙虚であるのか」の一喝だった。熱く燃える書作には、深い反省と恩返しの念が秘められていたのだ。

立体感に富む『舞(まい)』は、支えてくれた人々への感謝を込めて、体当たりした淡墨行草(たんぼくぎょうそう)の力作。穂先の長い大筆（超長鋒(ちょうちょうほう)）で勝負に挑み、縦画(たてかく)に熱中した粘り強い曲線は、「自分でも驚くほど変化した」とか。パワフルな運筆(うんぴつ)は、無邪気なほど純朴で、命輝く炎の舞いとなった。

『また風の障子がしゃべり出す』（尾崎放哉(おざきほうさい)の句）は、無技巧の技巧ともいうべき隷書(れいしょ)の直線を用いて、古法を現代に生かしたシャープな空間を試みた。烈風にさらされた孤独な俳人の生涯が、無一物ゆえの透明感を伴って、そくそくと伝わってくるではないか。

日々没頭する書作で生動感を覚えたのか、「体調不良の時でも、自然に心身が整えられる」と語る抱泉さん。だから「必然性を大切に、こびることなく、全力で前進したい」。教壇で若者を指導しながら、自らに課するのは、「熱量高く、常に挑戦」の多彩な表現である。

※柴山抱海（1941-）＝鳥取県生まれ。現代書の巨匠・手島右卿(てしまゆうけい)を継承して国内外で活躍。公益財団法人独立書人団参事。

『また風の障子がしゃべり出す』（淡墨、240㎝×60㎝、2022年）

『舞』（淡墨、176㎝×76㎝、2022年）

ごんすい・ほうせん
本名：言水さつき。柴山抱海に師事。新潟大学教育学部特別教科書道教員養成課程卒。高校教諭を務めながら、独立書展や山陰書人社を中心に活躍。独立書展特選、同選抜展準会員賞、「放哉を書く」展大賞、鳥取市文化賞受賞。独立書人団、毎日書道会会員。

共に生き 育む社会へ

動物愛護の取り組み

同じ家で寝起きし、散歩をしたり、時には一緒に旅行へも。
飼い犬・猫たちはいまや、まさに家族も同然の〝伴侶動物〟。
しかし、飼育放棄、虐待、野良猫の増加、殺処分など
諸問題は依然としてなくならない。
「そこに目をつぶってはいけない」。動物の尊厳を守り、
共に生きる社会をつくろうと奔走している人たちがいる。

文／鳥飼 明子　写真／田中 良子

米子TNRの会

山陰初のスペイクリニック開所

「不幸な猫を増やさぬ」信念を貫く

猫の飼育数は近年、犬を超えた。猫カフェ、猫島に猫寺、話題の動画など今や猫の一大ブーム。野外で気ままに過ごす姿は実に和む。しかし猫の繁殖期は年2～3回、1度の出産で平均3～5匹産むので、1年に約10匹増える計算だ。ボランティア団体などが保護・譲渡活動にいくら励んでも、強い繁殖力に追いつけず、ふん尿、鳴き声、ごみあさりなどのトラブルに発展することも多い。

その問題と猫の命を守る対策が「TNR」（※）だ。野良猫を捕獲して不妊去勢手術を行い、元いた場所へ戻す活動で、県西部のボランティア団体「ねこいえ米子」「うちスペTNR部」「にゃんこのお家」は以前から懸命に取り組んでいるが、皆同じ悩みを抱えていた。動物病院で可能な手術は1日に数匹、予約が多いと数カ月待ちにもなり、捕獲した猫の数に追いつかないのだ。そこで3団体はタッグを組み、「米子TNRの会」を発足。不妊去勢手術専門施設「野良猫のための米子スペイクリニック」設立へと立ち上がった。

代表の生林美鈴（いけばやしみれい）さんは以前から、ふじい動物病院（米子（よなご）市）の院長で獣医師の藤井浩平さんに同施設の構想を語っており、熱意にほだされた藤井さんは病院裏の敷地を提供、手術への協力を申し出た。

「米子TNRの会」代表の生林さん、メンバーの永田さん（左から）。活動はメンバー数人が交替しながら行う

TNRの活動に協力を申し出た獣医師の藤井さん。診療の合間を縫って、てきぱきと手術をこなす

問 米子TNRの会
✉ mareha224@ezweb.ne.jp

※野良猫の手術は上記アドレスに要相談。
【相談→視察→協議→日程調整→実施】

TNRのために捕獲された野良猫たち。手術後は元いた場所に戻される★

★写真提供：米子TNRの会

※TNR＝Trap（トラップ／捕獲）、Neuter（ニューター／不妊去勢手術）、Return（リターン／元の場所に戻す）の頭文字

地道に両輪での活動が大切

～TNRと地域猫活動の違い～

TNRは「動物愛護」が主眼で、無秩序な繁殖により野良猫が増えることを抑制し、猫の健康や生活を守るとともに、安楽死・殺処分される猫を減らすのが目的。活動主体はボランティア団体・個人、地域コミュニティー、行政など多様だ。捕獲器は自治体や動物病院、ボランティア団体などで借りられる。手術費用を自治体が補助する制度もあり、申請手続きにより、個人で行っても受給可能だ。（自治体により金額に違いあり）

一方、地域猫活動は、ごみあさり、ふん尿、鳴き声など、野良猫によって起こる地域のトラブルを改善・解決するための活動。TNRと同じように不妊去勢手術や頭数管理を行うが、地域でルールを作り、給餌、トイレの設置、ふんの清掃なども実施する。地域住民が主体となり、行政やボランティア（個人・団体）が協働して取り組む。

いくら猫の保護・譲渡活動を頑張っても、野良猫が繁殖するスピードに追いつけないといわれており、TNR・地域猫活動を両輪で、地道に進めることが、猫たちを取り巻くさまざまな問題の解決につながる。

強力な味方を得た生林さんらは、クラウドファンディングで募った資金500万円で、手術室となるプレハブ、手術器具などをそろえ、2022年12月、山陰初のスペイクリニックが誕生した。

診療の合間を縫って手術を行う藤井さんは、「苦労はない。むしろ、捕獲や手術の準備・後片付けなど、ボランティアさんの方が大変」と気遣う。そう、手術部位の毛刈り・洗浄・消毒、記録写真撮影など、手術以外の作業は全て、同会メンバーとボランティアが担っている。労を惜しまぬこの活動で、半年ほどで約180匹を手術した。

「いかに効率よく、数をこなすかが課題。10年後には野良猫の数を半数以下にしたい。不幸な猫をこれ以上増やしたくない」と生林さん。共に活動する永田（ながた）左和さんも「TNRは誰でも出来る。野良猫問題は地域の問題として、地域で取り組んで欲しい」と訴える。「人々の暮らしも猫の命も守る」という信念で、メンバーたちは今日も捕獲現場に向かう。

モンタ犬猫ネット

命の尊さ見つめ、訴え続ける

犬猫の収容・殺処分数を減らすには、保護・譲渡活動を行うボランティアの力が不可欠だ。「モンタ犬猫ネット」（鳥取市）もその一つ。代表の谷本香菜（かな）さんはペットサロンを営むなか、顧客や近隣の相談に応じているうちに問題の大きさを感じた。7年ほど前から副代表の新田文（にったあや）子（こ）さんら仲間と共に、保健所に収容された犬猫を受け入れ譲渡会を開きつつ、TNRにも励む。

子猫には数時間おきの授乳、警戒心が強い猫は根気よく関わり人なれさせる。「常に自宅で数匹の世話をしている」と谷本さん。毎月第2・4日曜日に開く譲渡会で、新しい家族との縁をつなぐ。

昨今、保護犬・猫を迎えようという人は増えた。しかし都度、来場者の身勝手な言動には心を痛めてもいる。新田さんは「うちが受け入れるのは高齢、あるいは病気や障がいのある子が多い。譲渡に不利なのは承知の上だが、『イメージが違う』『欲しいのはこんな子じゃない』とはあまりにも心無い」と吐露。

人々の無理解など高い壁も

またTNRの現場では、「野良猫にえさをやってかわいがるが、出産には無関心で、不妊去勢手術は『かわいそう』と主張する人も。そんな猫は出産回数が多すぎ『子宮がボロボロ』と獣医師も言うほどなのに」と谷本さんも憂う。猫ではなく「人の意識」に疲弊し、費用面なども含め、次々と立ちはだかる壁に悩む日々だ。

自力で排泄はできないが、元気いっぱいに走り回る保護猫「ムー」

モンタ犬猫ネットの新田さん、谷本さん（左から）

問 モンタ犬猫ネット
［ブログ］https://ameblo.jp/7528535/

そんな2人を励ますように、側にいた保護猫のムー（3歳・メス）がミャオーンと鳴いた。交通事故で脊髄を傷め、自力で排泄ができないものの、高い棚に飛び乗れるぐらい元気いっぱい。「甘えんぼのかわいい子。ハンデも個性と受け入れてくれる里親さんとのご縁を信じたい」

本当の動物愛護とは何か、2人とムーに教えられた気がした。

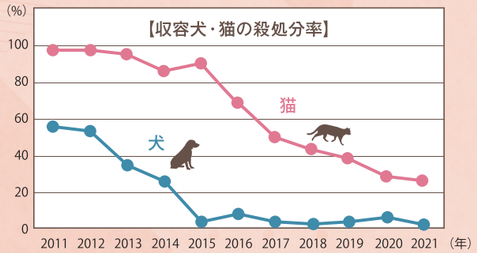
ペットサロンの近所に居付いている地域猫たち。
耳には避妊去勢手術済みのしるし「サクラマーク」がある

殺処分ゼロ目指し、さらに譲渡を促進

～鳥取県の現状と取り組み～

約10年前、鳥取県は犬猫の殺処分率全国ワースト2位。しかし今は、動物愛護管理法の改正、民間の動物愛護団体やボランティアとの連携などにより、その数は減少の一途をたどる。2021年度には、犬の殺処分数「ゼロ」を達成（収容後に傷病等で死亡した数を除く）。猫も着実に減ってきており、全国的に見ても低い数字だ。

鳥取県くらしの安心推進課の牧野智行さんは、「保健所では、迷子等で収容した犬猫は飼い主が見つかれば返し、飼い主が見つからない場合は譲渡を進めています。殺処分は傷病が重篤で治癒の見込みがないなど、やむを得ない場合のみ。基本的に『保護期間が超過』などの理由では殺処分にはしない方針です」と現況を説明する。



【出典：鳥取県】

返還・譲渡率は犬が9割以上、猫は7割近くと高い。これは県動物愛護センターや、ボランティア団体などの地道な活動のたまものだ。県は、譲渡をさらに促進するため今年2月、飼い主募集サイト「鳥取わんにゃん家族」を開設。同サイトでは、譲りたい人と引き取りたい人のマッチングができるほか、チャットで当人同士の直接やりとりが可能になり、飼い主の入院など急な事情で飼育できなくなった場合でも、次の飼い主を探しやすい。

また来年には、米子保健所の新築移転に伴い「鳥取県西部犬猫センター」も新たに整備。運営を動物愛護等に携わる事業者に委託、従来の収容・譲渡活動に加え、適正な飼い方や犬のしつけ教室、地域猫活動の研修会などにも力を入れる。いまだに犬猫を捨てる事例、多頭飼育崩壊、ネグレクトなどの事案も寄せられているためだ。

「ペットは家族の一員、終生飼育が原則です。今一度『飼い主の責任』について考えてほしい」と、牧野さんは力を込めて呼びかけている。

問 鳥取県くらしの安心推進課
☎ 0857-26-7877
WB https://www.pref.tottori.lg.jp/animal/

鳥取県の犬猫と新しい家族が集う
マッチングサイト「鳥取わんにゃん家族」
WB https://tottori-inuneko.com/

人と動物の未来センター
アミティエ

広々としたドッグランを駆け回る保護犬たち（★）と
猫舎で気ままに過ごす保護猫たち

県と連携、殺処分減少に貢献

緑に包まれた静かな農地の一角に「人と動物の未来センター・アミティエ」（倉吉市）がある。広々とした芝生のドッグラン、キャットウオーク付きの猫舎では保護猫がくつろぐ。

公益財団法人動物臨床医学研究所が2013年9月に開設、東日本大震災で被災した犬猫の受け入れからスタートした。14年からは鳥取県と連携し、「鳥取県動物愛護センター」として、保健所収容の犬猫を引き取り、新しい飼い主を探す活動を進めてきた。

同研究所理事長で医学・獣医学博士の山根義久さんは、幼少の頃から牛や豚、兎、犬など多くの動物と一緒に暮らしてきたため、人一倍動物愛が深い。「殺処分される犬猫を1匹でも多く救う」と強い決意で設立・運営に奔走し、これまでに犬250匹、猫431匹を受け入れ、犬236匹、猫406匹を譲渡した（23年5月現在）。

大好評で毎年開催する「わんわん運動会」のほか、「犬のしつけ方教室」や
市民公開セミナー（譲渡講習会）も定期的に実施（写真左から）★

問 人と動物の未来センター・アミティエ（鳥取県動物愛護センター）
所 倉吉市下福田706-127　☎0858-33-5397
WB https://www.haac.or.jp/amitie.aspx

★写真提供：人と動物の未来センター・アミティエ

「動物愛護に終わりはない。
本質をしっかり考えて継続、実行する
ことが大事」と語る山根さん

アイデア次々、盛んに啓発活動

受け入れた犬猫は全て獣医師が健康診断、不妊去勢手術、マイクロチップ挿入、ワクチン接種などを行う。一貫してここまでできる施設は全国的にも少ない。また、フェスタ、犬たちの運動会など多彩なイベントを定期的に開催し、気軽に動物と触れ合える機会を提供。犬のしつけ方教室、無料相談会など引き取った後の飼い主のケアもしっかり行う。動物愛護に関心を高めてもらうためのチャリティーコンサートも好評だ。

この10年間で、小型犬用ドッグランの増設、猫舎の改修といった設備充実にも注力。さらに昨年4月、「動物と触れ合いながら本を読み、豊かな心を育んでほしい」と、施設内に「子ども図書館」も開設した。

山根さんは昔、海外での仕事の際、「日本は動物愛護が遅れている。どうなっているんだ」との言葉に衝撃を受けて奮起。考えに考えて知恵を出し、有言実行してきた。そして、まだまだ進化は止まらない。動物愛護に対する〝さらなる意識改革〟が次の目標。新しいアイデアを語る山根さんの瞳は、いまなおキラキラと輝く。

保護犬に癒やされ、自立の道へ
～グループホーム「コモンハウス古市」～

玄関ドアを開けると、黒毛の犬が尻尾をブンブン振りながら出迎えてくれた。甲斐犬の血を引く「ひびき」（7歳・オス）だ。ここは、2022年7月に開所したグループホーム「コモンハウス古市（ふるいち）」（鳥取市）。精神または知的障がいのある人が自立した生活を送るための施設で、「保護犬と共に暮らす」のが大きな特徴だ。定員5～6人の住宅が4棟あり、12人（6月20日現在）が各棟で共同生活を送る。ひびきもそのスタッフの一員なのだ。

「ひびきとの触れ合いは入居者の癒やしになっているようです」と岩本さん

「ひびきとの散歩は、入居者の運動不足解消や気分転換の機会になる。おやつをあげたりブラッシングしたり、触れ合いが心身に良い影響をもたらし、自立のきっかけになれば」。そう話すのは、施設を管理運営する株式会社コモングラウンド専務取締役の岩本慎司さん。

岩本さんは、もともと飲食業に携わっていたが、ここ数年のコロナ禍で先が見通せない状況に。何かほかに「地域を元気にできる仕事」をと模索中に、ペット共生型障がい者グループホーム事業に出合う。「精神障がいのある人のためのグループホーム不足、空き家の増加、犬猫殺処分など、地域の課題解決に貢献できるかも」との思いで、挑戦したくなったという。

第1号の保護犬として、飼い主が亡くなり行き場をなくしていたひびきを引き取った。「今はまだ1匹だけですが、条件が整えば新たに保護犬を受け入れたい」。人と地域と犬猫たちに寄り添い、共に歩もうとしている。

問 コモンハウス古市
所 鳥取市古市301・鳥取市古市626
☎ 070-9042-0391
WB https://commonground.localinfo.jp/

鳥取のうま味

心とカラダにやさしく栄養満点

「Raw&Vegランチ」2500円（税込）は、10種類程度のおかずにビーツのスムージー、イチゴのローケーキ、五分づき米に雑穀を混ぜたごはん付き。スムージーは、秋冬にはスープに変わる。
※季節によりメニューは変更

Atelier（アトリエ）虹の手
所 東伯郡琴浦町浦安185
☎ 080-6337-3878
✉ nijinote.8@gmail.com
営 金、土曜
※3日前までに要予約
時 ランチ：12時～15時
ディナー：17時～20時
※平日限定で10人以上であれば要相談

Instagram　facebook

とにかく華やか、気持ちが沸き立つ品々が並ぶ。低温調理のローフード（※）と野菜を盛り合わせた「Raw&Vegランチ」だ。

店主の中村容子さんは、もともと肉料理を摂りすぎると身体に違和感を覚えていた。出産後、食への関心が高まり、その後ローフードと出合い、「食べると体が軽くなる」と実感。「食に対し同じように感じている人がいるはず」と、ローフードマイスターの資格を取得する。地元産や無農薬の野菜を主体に、豆やナッツ類をタンパク源として、スパイスやハーブで変化をつけた料理を5年前から提供し始めた。

ひと皿めはイチゴ、ソラマメ、アボカド、ビーツ、ウミブドウ…と10種類以上の季節の果物や野菜が素材の味を生かしつつ、繊細で複雑な味にドレスアップされている。

もう一方の皿のズッキーニのラザニアは、ホワイトソースの代わりにカシューナッツのソースを使い、まろやかで香ばしい。ナッツとトウモロコシのハンバーグは、プチプチとした食感でしっかりした食べ応え。いずれも肉が恋しくならない満足感がある。

植物の生命力をそのまま吸収できるうえ、酸味、甘味、辛味、苦味とバリエーションの豊かさが食欲をそそり、最後まで飽きさせない。

染織家でもある中村さんは、葛を刈り取って糸にし、布に織り上げる。自然と共に暮らす毎日から生まれたローフードは、さまざまな人にしっくり合いそうだ。

文／松村 亜紀子　写真／佐野 明美

※ローフード＝本来は生（Raw）の食べ物の意味だが、48℃以下の加熱であれば、酵素や栄養分を壊さないため、ローフードに含む場合も。

「朝比奈三郎、曽我五郎の草摺りを曳く図」（嗒然画、貴布禰神社蔵／タテ87.5cm×ヨコ113.8cm）
1860年3月、海池村（現皆生）の氏子30人が奉納した絵馬。絵は歌舞伎の『曽我物語』の一場面

開運おかげ詣で
因幡と伯耆の神社

絵馬の裏に書かれた嗒然の自叙伝の一部

古くからの絵馬が伝わる社

貴布禰神社　米子市

貴布禰神社の社殿

「合格祈願」「必勝」「すてきな人に出会えますように」など、参拝者の願いが込められた絵馬の風景は、神社に欠かせない。

絵馬の歴史は平安時代、雨乞いのために貴船神社（京都府）に馬を献上したことにはじまる。しかし、生きた馬は高価なため、代わりに木の板を馬型にした「板立馬」を奉納するようになり、『今昔物語集』にも「板ニ書タル絵馬有リ」と絵馬が登場している。鎌倉時代にはさらに一般化し、江戸時代になると馬以外の絵柄も登場する。

米子市にある貴布禰神社は、貴船神社を勧請（※1）した社で、古くから絵馬の奉納が多い。中でも、1860年に奉納された『曽我物語』（※2）を描いた絵馬は貴重な資料として注目される。氏子30人がお伊勢参りを記念し、奉納した。これを描いたのは「嗒然」という画僧で、65歳の時の作。自身も氏子で、裏書に絵馬奉納に関われた喜びを記している。他にも江戸～明治時代に奉納された古い絵馬が多数あり、主なものが拝殿に飾られている。

画家による絵馬の奉納は現在も続く。画家で絵本作家の玉井詞さんによる干支にちなんだイラストや、イラストレーター・すやまとしおさんによる龍をテーマにした日本画などで、いずれも同社の氏子である。

文・写真／角田 治

※1 勧請＝神仏の分霊を他の場所に移しまつること
※2 曽我物語＝主に平安末期～鎌倉・室町時代にかけ、戦乱を主な題材として書かれた軍記物語のひとつ。浮世絵や読本の題材として好まれた

拝殿に飾られている絵馬と玉井詞さんが寄贈したイラスト

ご利益
ご神徳：祈雨、止雨、晴雨、治水、産業など。

プロフィール　つのだ・おさむ　グラフィックデザイナー。神仏探訪家。『山陰の神々 古社を訪ねて』（山陰の神々刊行会）など、神社にまつわる書籍の取材・執筆・撮影。

神社情報　社号：貴布禰神社　所 米子市車尾5-1113　☎ 0859-33-7036

燃える赤、晩秋彩る（智頭町）

撮影／若松紀樹（鳥取市）

諏訪大社（長野県）を総本社にもち、創建は鎌倉時代と歴史を誇る諏訪神社。境内や周辺に広葉樹が多く茂り、秋が深まる頃には、紅葉目当ての観光客らでにぎわう。スギの大木を奉納する町最大の伝統行事「柱祭り」は６年に一度、春に行われる。

発色豊かなステンレスでチェスの駒、ボードもカラフルに

価値観変えた世界初の発色技術

「オロル」はフランス語で「オーロラ」の意味。
オロル株式会社（鳥取市）のステンレス発色技術は
銀一色の世界に、社名のごとく幻想的な色彩をもたらした。
デザイン性、耐食性、抗菌・抗ウイルス性などの
優れた性能に、さまざまな業界が注視する。

「〝世の中の当たり前〟に昔から疑問を持っていた」と木下さん

従来の色付きステンレスは、主に塗装によるが、発色技術「ORORU（オロル）処理®」は、表面に張った腐食を防ぐ薄い酸化皮膜の厚さによって約20色の発色を実現。原理としては、CD（コンパクトディスク）の原理と同じだという。塗装のステンレス製品と比べ、サビに強く、光沢感も3段階で表現できる。

ステンレスの表面処理技術は、もともとアメリカの企業が開発していたが、膜の厚さの精密制御が困難を極め、実用化されていなかった。それを世界で初めて精密制御による色調の均一化に成功したのが同社だ。社長の木下淳之（あつし）さんは、「世界のどこに行っても、ステンレスはシルバーしかない。学生の頃から『もっといろんな色があれば、かっこいいのに』と感じていた」と、原点を語る。

木下さんは、鳥取市内のメッキ会社の4代目でもある。メッキ業界の根強い下請け気質を変えたい思いもあり、2013年から開発をスタート。NEDO（※）の「中堅・中小企業への橋渡し研究開発促進事業」を活用し、7年かけて大型化や複雑形状への対応も成功した。この間に「メッキとは異なる唯一の発色技術をブランド化して、世界に挑戦したい」と、18年にオロルを設立した。

豊かな色と高い機能性を誇るORORU処理®は、ステンレス製品の「無機質で冷たい」という従来イメージを打ち破り、新しい価値観を生み出したのだ。

例えば、識別のしやすさ、抗菌性の高さは医療や介護分野に用途が広がり、抗金属アレルギー性は、アクセサリーにも有効。デザイン・耐久性の高さは、台所用品や外壁などに好評だ。そのほか自動車やエネルギーなど、多種多様な分野での活用が期待できる。さらにリサイクルの際は脱膜などの処理も不要で、環境にもやさしい。

「キャッチフレーズは『世界の価値観を変える』。今後も新しい研究開発に挑み続ける」と木下さん。概念に疑問を持ち、そして覆す。その自由な発想は止まらない。

文／倉恒 弘美　写真／萱野 雄一

※NEDO＝国立研究開発法人 新エネルギー・産業技術総合開発機構

マグカップやコーヒードリッパーなど
多様な製品の数々

外壁にORORU処理®が採用された腕時計・ジュエリー販売店（神戸市）＝写真提供：オロル株式会社

オロル株式会社
代表／木下 淳之
設　立 / 2018年2月
資本金 / 1000万円
所 鳥取市南栄町1
☎ 0857-51-0608
WB https://ororu-inc.co.jp/

風と砂が育む命 砂丘の生きもの

山陰海岸ジオパーク認定ガイドとして活躍する石川さん

日本海の青い海を背景に「馬の背」と呼ばれる巨大な砂の壁がそびえ立つ鳥取砂丘。海風による飛砂と、夏は50℃を超える乾燥した地表。この過酷な環境の中、なんと植物約140種、動物約700種もがたくましく生き抜いている。鳥取砂丘ビジターセンターの石川瑛代（あきよ）さんに詳細を聞いた。

TOTTORI おもしろ手帖 発見 づるり探検隊長がゆく
VOL.12

ニホンアマガエル

なぜここにカエル!?の謎

夏には表面温度が50℃にもなる砂丘に、なぜ！？

驚くことにカエルが5、6種類も生息する。秋～春に馬の背の麓に出現する淡水の池（通称：オアシス）では、春にはニホンアマガエルのオタマジャクシが確認されるが、池は程なく蒸発するので、どの程度カエルになるかは謎だ。

カワラハンミョウ

鳥取砂丘は残されたすみか

日差しの強い日は、散策する人の陰にこっそり入ってくるという

熱い砂を避けようと、長細い足でつま先立ちのように素早く走り、大顎（あご）で小さな昆虫を捕らえて食べる。港湾整備や海岸侵食などで生息地の砂丘海岸が全国的に減少し、絶滅危惧種に指定されている。

コウボウムギ

硬く厚い葉、網状の根。密集して群落を作る。

ハマゴウ

長い茎を砂中にはわせ、横に広がる。漢方薬に利用され、葉や果実はミント系の香り。

潮風の強いエリアの植物

動物たちも砂丘観光？

早朝にはノウサギ、キツネ、タヌキなど、動物の足跡も。どこから何の目的で来ているかは、ベールに包まれている。

ノウサギの足跡

ケカモノハシ

先端の穂が2つに分かれ、カモのくちばしに似ているのが名の由来。葉に白い短毛が密生。

バリンホウキ

1.5m以上伸びるケカモノハシの根で作ったほうき。かつては、「砂丘の土産」として販売も。

ハマニガナ

地下茎で養分や水分が蓄積されており、砂上に出ている葉が枯れても復活できる。

海に近いほど砂・風・塩分に強い特長

海から内陸に向かって塩分や飛砂の量が変わる砂丘海岸では、植物は強風に耐えうるよう根を張り巡らせたり、株を横に広げたりと、それぞれの特長によって分布が変化している。

問 山陰海岸国立公園　鳥取砂丘ビジターセンター
所 鳥取市福部町湯山2164-971
WB https://www.sakyu-vc.com ☎ 0857-22-0021

文・イラスト / 渡部紘巳（わたなべ・ひろみ）　納豆が大好きなイラストレーター。1982 年生まれ、鳥取県育ち。づるづるした食べ物が好きなことから、屋号は「スタジオづるり」。WEB=http://dururi.com

音符がつなぐ時と絆

活動続けるビッグバンド＆合唱団

音と音が重なり合い、響き合う美しい旋律は、
聴く人すべての心を震わせ、深い共感の輪をもたらす。
そんな音楽の力を信じ、長きにわたり
活動を続ける音楽団体がある。
稽古を積み、演奏会を重ねることで
アマチュアながら、その高い技量にファンも多い。
熱量を保ち続ける彼らの根源を追った。

文／日高 むつみ　写真／山田 真美

レインボー・ジャズ・オーケストラ

Rainbow Jazz Orchestra

迫力ある工夫を凝らしたステージ展開で聴衆を魅了する定期演奏会（2022年11月、米子市文化ホール）★

高い技術と個性あふれる演出

まばゆい金管楽器が舞台狭しと並び、指揮者の合図とともにあふれ出す音の洪水。トランペットにトロンボーン、サックスの紡ぐメロディーを、ドラムやベース、ピアノが盛り上げる。重なり合う低音が腹に響き、躍動感あるリズムにつられて体が動き出す。

レンボー・ジャズ・オーケストラ（以下RJO）は、1972年に米子市で創立。現在は34人が所属し、地方にありながら半世紀余りの歴史を刻み、高い水準を保つビッグバンド（※1）として一目置かれている。幅の広い演目、ボーカルやダンスとの共演など、常に工夫を凝らしたステージには定評があり、定期演奏会のチケットは大人気だ。

原点は、隣町である島根県安来市の医師・松永朗（現顧問）さんの「山陰に質の高いビッグバンドを根付かせたい」との思い。「松永さんの熱意に地域の音楽の先生が応えたと聞いています。専門教育を受けた方々だけに基礎レベルが高く、創立当初からクオリティーの高い演奏ができたのでしょう」

そう話すのは、バンドマスターの清水泰さん。創立3年目に高校生のトロンボーン奏者としてメンバーに加わった。県外での就職を機に一度はバンドから離れたが、約30年前に米子市へのUターンと同時に再加入した。「うちは、去る者は追わず来

バンドマスターの清水さん。ジャズ関係のラジオ番組で長年、パーソナリティーを務めた経験も

コンサートマスターの雑賀誠司さん。指揮のほか、選曲や楽曲の解釈も行う

★

★写真提供=レインボー・ジャズ・オーケストラ

毎週水曜日の夜が練習日。短い時間のなかステージ披露に向け、精一杯励む

半世紀以上の歴史でファン魅了

る者は拒まずがポリシー。僕も帰った途端、友人から連絡があり即再開しました」

メンバーは仕事も音楽歴もさまざまだが、誰かが抜けても不思議と新たな奏者が加入するという。代替わりして質が落ちたと言われないよう、自主練習も合同練習も高い頻度で重ねてきた。

「コンマス（※2）が難曲ばかり持ってくるし、正直なところ、キツイ。でも音を合わせた時の達成感や、観客の反応は何にも代え難い喜び。アマチュアですが、お金をいただく以上レベルは落とせない」

年間を通じて、各演奏会のほか地域イベント、社交ダンスやパーティーなどでの演奏の依頼が舞い込む。「楽しみながらも気持ちはプロという思いで妥協せず、今後も皆で精進したい」

誕生から半世紀、この街にジャズを根付かせたRJOの進化は止まるところを知らない。

若い力で活気、音にも勢い

ドラム・太田祐美さん
トロンボーン・小西悌之さん

メンバーの平均年齢は50代後半。熟練の渋さは魅力だが、高齢化の課題もある。しかし、近年、未来を担う若い世代の入団も少しずつ増えてきた。そのうちのふたりが太田祐美さんと小西悌之さん。太田さんはUターンを機に新しい趣味としてドラム教室に通う。上達するに連れ、誰かと音を合わせたくなり、門を叩いた。「経験が浅く受け入れてもらえるか不安でした。でも温かく迎えてもらい、のびのびやってます」

一方、小西さんは学生時代に名門の大学ジャズバンドに所属。「演奏で要求されるレベルは高いですが、音楽的な向上のためと納得できます。個性豊かなメンバーも面白いですよ」

またソロ演奏の際には、「ナイスソロ！」の声がかかり、舞台が盛り上がるのも魅力と口をそろえる。

「2人が入って全体の音にも勢いが出た」と清水さんも喜び、期待する。大学などの演奏団体の若い世代への働きかけも進行中だ。RJOの明るい未来が開けてきた。

演奏やメンバーの楽しさを語る太田さんと小西さん（左から）

※1 ビッグバンド＝主にジャズにおける編成で一般的に17人が定型。グレン・ミラー・オーケストラ（アメリカ）などの影響を受け、日本では1950～60年代に多くのバンドが結成された。
※2 コンマス＝コンサートマスターの略で、演奏を統率する役割。RJOでのコンマスは指揮のほか、選曲や楽曲の解釈も行う。

問 レインボー・ジャズ・オーケストラ
☎ 090-4656-4942（事務局・岡田さん）
WB http://rainbow-rainbow.com/

【演奏会情報】
◉第52回定期演奏会
時 11月23日（木・祝）18時30分開演
所 米子市文化ホール

鳥取男声合唱団
Tottori Male Chorus

「本音を語り合ってきたからこそ、続けてこられた」と、山根さん

ホールに響き渡る、朗々たる歌声。太く力強いバスとバリトンの上でトップテナーがメロディーを奏で、その間をセカンドテナーが自由自在に泳いでいく。豊かなハーモニーで聴衆を魅了するのは、鳥取男声合唱団の面々だ。

結成のきっかけは、1997年開催の「県民による第九鳥取公演」だ。男性が少なくパート練習も心もとない状況を打開しようと、当時、鳥取大学の助教授だった西岡千秋さんらが音頭を取り、翌年には合唱団が誕生した。

団長の山根頼博（よりひろ）さんは、「当初は10数人で、練習場所は営業終了後の駅前喫茶だった。25年経ち、現在は45人に。30～90代まで年代は幅広いです」と話す。

週1回の合同練習に加えて年2回の強化合宿をこなし、2年に一度は定期演奏会を開催している。3年に一度の「第九鳥取公演」への参加や、不定期で声がかかる病院や学校への慰問演奏会と忙しい。

「それぞれ仕事もあり、練習量は圧倒的に少ない。それを自主練習でカバーできるよう歌詞入りのパート音源を作って無料動画サイトで共有しています」。とはいえ、全員がそろって合わせる機会は限られるという。「それでも四半世紀続いたのは歌が好きだから」

また、団員同士のフラットな関係性も長続きの秘訣のようだ。「酒の席で歌の話をする時は皆、平等。祖父と孫のような世代の2人が真剣に議論するなんて、なかなかないでしょう？練習や発表後の飲み会が〝生命線〟です（笑）」

高齢世代が多いが、合唱では年齢を重ねることが必ずしも損失にはならない。初代指揮者の土井康作さんは「人生の厚みが声に歌に表れる」と団員に語っている。

パワーみなぎる気迫のステージ

毎週金曜日の夜が練習日。指揮者に指導を受けながら各パートが息を合わせる

鳥取市の文化交流使節団としてドイツのハーナウ市を訪問。現地の合唱団とジョイントコンサートを開いた（2005年9月）★

定期開催の「県民による第九鳥取公演」にも参加（2019年12月、鳥取県民文化会館）★

力強く優しく、豊かな声色

「男声合唱は力強いだけではなく、ソフトなトーンから静かに柔らかく広がって、荒々しさや迫力を感じさせる部分もある。そのギャップや変化が醍醐味で、それぞれの個性ある声が合わさってこそ成立するのが魅力です」

舞台に立つ面々の歌う姿は、老いも若きも表情豊かで、背筋がピンと伸びて若々しい。聴く側にも、みなぎるパワーが伝わってくる。これも、四半世紀を超えて愛される理由かもしれない。

迫力や力強さとともに、やさしいハーモニーを披露（2023年6月、鳥取市民音楽祭）

「やめようと思ったことはない」
創立メンバーの奥田芳正さん

「歌うことでストレス解消にもなってきた」と奥田さん

現在、合唱団の会計を担当している奥田芳正（よしまさ）さんは、創立メンバーのひとりだ。「歌をやめようと思ったことは一度もありませんね。合唱があったからこそ、仕事も続けて来られたのかもと妻も言うほどです」と、これまでを振り返る。

パートはトップテナーを担当。自分のパートをしっかりと歌いながら、他のパートの音にも耳を傾けて全体のバランスをとっていくことは、かなりの集中力が必要だという。「集中していると、諸々の悩みもふき飛びます」。さらに「何度練習してもミスする部分を、それでも何回も何回も音を聞き直してやり直す。すると、ある時ふいにうまくいく瞬間が訪れる。そのうれしさは言葉にできない」とやりがいを語る。

「合唱は体が資本。裏返せば、体ひとつで長く続けられる趣味。そして声を出すのは健康にもいい」。さらなる仲間を増やしたいと入団を呼びかけている。

有志メンバーで小学校を訪問、校内音楽会に参加し、児童と交流を深めた（2011年2月、鳥取市立美保南小学校）★

問 鳥取男声合唱団
☎ 090-3170-9632（団長・山根さん）
WB http://www.dansei.server-shared.com/

【出演情報】
◉久松山麓合唱祭
日時 10月22日（日）13時開演
所 鳥取市民会館

◉県民による第九鳥取公演
日時 12月10日（日）14時開演
所 とりぎん文化会館梨花ホール

★写真提供＝鳥取男声合唱団

From Iwate

VIVA トットリ LIFE

輝く I J U ターン者たち

文／倉恒 弘美　写真／萱野 雄一

国宝・投入堂（なげいれどう）で知られる三徳山三佛寺（みとくさんさんぶつじ）（三朝町（みささちょう））近くで自給自足の暮らしを送る幸田直人（こうだなおと）さん。大学時代の経験から、「好きなことを仕事にする」と決め、鳥取にUターンし、自給自足に必要な術を身に付けた。現在は「百姓、もしくは自給自足料理人」と称し、暮らしを楽しみながら、コミュニティーづくりを目指す。

始まりは岩手での暮らし

「30歳頃には生き方を決めたほうがいい」。岩手県での大学時代、教授から言われた言葉が頭に残り、20代は「自分の好きなことを仕事にするにはどうするか」を基準に行動した。目指したのは、岩手県で体験した暮らしだった。

大学では、環境教育と地域おこしを学んだ。在学中、感銘を受けたのが、岩手郡葛巻町（くずまきまち）のエコスクール「森と風のがっこう」（2018年閉鎖）の取り組み。標高700メートルにある小さな山里の廃校を利用し、自然エネルギーを取り入れた循環型の暮らしを実践しつつ、子どもの居場所づくりや自然体験活動などの新しい学びの場を創出していた。ここに約2年間住み込みで暮らし、大きな影響を受け、鳥取県にUターン。15年前から三朝町で暮らす。

「自分の好きな場所をつくるにしても、社会的に意味がないと仕事にならない。岩手で自給自足、持続可能、子どもの居場所などのキーワードを得ることができた」と振り返る。

約30羽のニワトリたちは、毎日のように卵を産んでくれる

生きるための技術を取得

しかし、技術がなければ自給自足の暮らしは難しい。20代は、三朝温泉の旅館で接客を学ぶなか、料理を作る方に興味を持つ。その後、倉吉市内のイタリアン店、和食店でそれぞれの料理を学んだ。

広々とした敷地内には、自作のカフェや小屋、家族で暮らす家屋などがズラリ

【I・J・Uターンの相談窓口】
公益財団法人
ふるさと鳥取県定住機構
0120-841-558
とっとり移住定住ポータルサイト「鳥取来楽暮」▶

『好きなこと』で生きていくことを追求し続けた結果が今の暮らし方です」と幸田さん

自給自足料理人（三朝町）

幸田　直人さん

北栄町出身

◎家族構成／妻と子ども3人
◎移住前の住まい／岩手県
◎移住時期／2007年
◎現在の仕事／自給自足料理人

カフェ「いちまいのおさら」
所 東伯郡三朝町坂本1608
☎ 090-7997-3321
WB http://jizokutottori.dokkoisho.com/
休 不定休（要予約）

好きな場所で好きな仕事を 社会に持続可能な暮らし提案

30歳の時に結婚と同時に起業、イベント出店や出張料理をメインに営業してきた。その後、大工技術を独学で身に付け、今では一軒家を建てられるほど。子どもも増えたことで家族との時間を優先して、自宅の敷地内にカフェを建てた。

現在の暮らしは、食・住・エネルギーの6～7割は自給自足だ。カフェは予約が入った時のみ営業し、北栄町（ほくえいちょう）の実家のブドウ園も継いで、一次産業に軸足を置く。自宅近くで米や野菜をつくり、鶏を飼い、狩猟もする。太陽光発電の蓄電システムも自作。柔軟に工夫する姿は実に楽しそうだ。

「世の中を否定するのではなく、社会の中で生きる一人として、消費を減らした居心地の良い暮らしを提案したい。モノの値段や、社会の仕組みを考えるきっかけにもなります」

「好きなこと」を形にした30代。「40代は、10～20年後に、仲間たちや若い世代が共に助け合って暮らせるコミュニティーづくりをしたい」と、次のテーマに向けて歩み始めている。